

# ニッポンへの発言



中森 明夫  
(コラムニスト)

毎日新聞 15(H27).5.19

1975年、私は15歳で上京した。学生運動の波は退潮して、当時は内ゲバの時代だ。若い奴らがヘタに理想や希望に燃えろと、ろくなことにならない。その末路は連合赤軍事件だと。反動で若者はシラケ派に走る。70年代は60年代の残滓のドグマ的な重力に支配され、どこか息苦しかった。

## キーワード

### 柄谷行人の〈希望〉

晴れた。自由になった気がしたのだ。柄谷の「マクベス論」と唯物論に対して、すべては幻想だという岸田秀の「唯幻論」は、当時の知的な若者たちに少なからぬ影響を与えた。それは70年代的重力からの解放の合言葉だった。そう、「80年代」を準備したのだ。

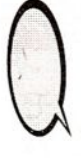


85年、私は25歳で「新人類の旗手」と呼ばれた。柄谷行人と知り合う。酒場の柄谷は酔っ払ってバカ話をする変なオヤジで、ツッコミを入れる私は、よく怒鳴られた。それでも、少年時代の私を「希望」から解放してくれた人というリスクはあったのだ。ところが……。

2001年、柄谷の新刊

『NAM原理』を手にとった私は、愕然とする。「希望の原理」の帯文!! 柄谷はNAMという組織を作り、社会変革をめざすという。冗談だろ?と呆れた。行きつけのバーで柄谷の朗読会があると聞いて、駆けつける。終了後、彼が出てくるのを待った。辻斬りのように、路上で「希望がないから絶望もないんじゃないから絶望もないんじゃないから絶望もないんじゃない」と突っかかった。柄谷の顔色が変わった。「中森は絶望がないから、希望がないんだよ」と一喝したのだ。あっ、と思った。なるほど、そうだったのか……柄谷行人は絶望しているのだ。だからこそ、希望を語り始めたのである。

スターズ・ターケルという米国のジャーナリストがいた。08年に96歳で没した。代表作は『仕事』。市井の数多くの人々の仕事についてのインタビュー集である。05年、ターケルの新刊が文春文庫で出た。タイトルの「希望」は「希望」を柄谷に進呈した。このエピソードは気に入っている。私は柄谷行人に「希望」をを手渡したのだ! 「この国には何でもある。だが、希望だけはない」20世紀末に書かれた村上龍の『希望の国のエクソダス』の一節だ。日本中の不登校中学生が反乱を起こす近未来小説である。あの物語で描かれた未来に私たちは生きています。かつて「希望」から解放された若者だった私は、今、55歳になつて、若い世代にこの国の大人たちが語れる「希望」はあるか?と考えている。私もまたようやく「希望」に目覚めて「希望」を語ろうとしているのだろうか?



数年前、酒場で久々に柄谷行人と遭った。彼は米国に絶望しているといった旨のことを口走った。そんなことはない、と私は持参していたターケルの『希望』を柄谷に進呈した。このエピソードは気に入っている。私は柄谷行人に「希望」をを手渡したのだ! 「この国には何でもある。だが、希望だけはない」20世紀末に書かれた村上龍の『希望の国のエクソダス』の一節だ。日本中の不登校中学生が反乱を起こす近未来小説である。あの物語で描かれた未来に私たちは生きています。かつて「希望」から解放された若者だった私は、今、55歳になつて、若い世代にこの国の大

毎月第3火曜掲載